



図 16 西池干潟ではコケゴカイ・ミズヒキゴカイが多産 (2016年2月24日)



図 17 冬期に北池の水たまりで高密度に見られたイトゴカイ類の巣穴 (2016年2月24日)



図 18 干潟に斜めに開いたケフサイソガニ類の巣穴 (2016年2月24日)



図 19 アナジャコ類の巣穴 (2016年2月24日)



図 20 冬期調査で多く見られたヨモギホンヤドカリ (2016年2月24日)



図 21 夏期に緑藻類の間に多く見られたミギワバエ類の幼虫 (2015年7月15日)

## 5. ヨコエビ類定量調査

### 調査方法

2005 および 2006 年に実施した調査と比較できるように同じ定点 (A~F の 6 地点) で 900ml ペットボトル (断面積 0.0047 m<sup>2</sup>) を用いて表層部のサンプリングを行った (図 22)。ただし南池奥の地点 (2005 と 2006 年調査での G 地点) は今回サンプリングできなかった。

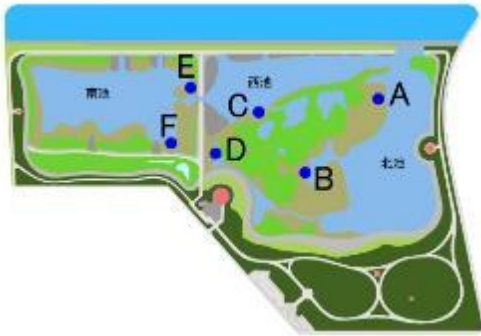


図 22 ヨコエビ類定量調査 調査地点と調査風景

### 調査結果

定点ごとの出現した生物の種類 (図 23) と個体数および 1m<sup>2</sup> に換算した個体数 (表 2) を示す。また、比較のため 2005 年と 2006 年の調査結果も示す (表 3 および 4)。



図 23 ヨコエビ定量調査で出現したマクロベントス。

1. ホトトギスガイ 2. アサリ 3. イソギンチャク類 4. ヒモムシ類 5. ユスリカ類の幼虫  
6. モズミヨコエビ(♂) 7. ポシェットトゲオヨコエビ 8. トンガリドロクダムシ(♂) 9. 同(♀)  
10. ニホンドロソコエビ 11. ヒゲツノメリタヨコエビ 12. キスイタナイス(♂) 13. 同(♀)  
14. カワゴカイ属 15. コケゴカイ 16. スピオ科の一種 17. イトゴカイ科 18. ミズヒキゴカイ

表2 定点ごとの出現個体数および1m<sup>2</sup>あたりに換算した個体数

	A		B		C		D		E		F	
	個体数	1m <sup>2</sup> あたり	個体数	1m <sup>2</sup> あたり	個体数	1m <sup>2</sup> あたり	個体数	1m <sup>2</sup> あたり	個体数	1m <sup>2</sup> あたり	個体数	1m <sup>2</sup> あたり
モズミヨコエビ	20	4260	1	213	58	12354			3	639		
ポシエットトゲオヨコエビ	1	213	95	20235	2	426	4	852	203	43239		
ニホンドロソコエビ			2	426	4	852	3	639				
トンガリドロクダムシ	120	25560	276	58788	60	12780	159	33867	194	41322	260	55380
ヒゲツノメリタヨコエビ					1	213						
ヨコエビ合計	141	30033	374	79662	125	26625	166	35358	400	85200	260	55380
イソギンチャク類							1	213				
ヒモムシ類									1	213		
ホトギスガイ	66	14058	2	426	5	1065	2	426	2	426	1	213
アサリ	1	213										
カワゴカイ属			4	852			3	639			25	5325
コケゴカイ			2	426	5	1065						
スピオ科							24	5112			1	213
ミズヒキゴカイ	5	1065	32	6816	43	9159	1	213	1	213		
イトゴカイ科	1	213	34	7242	6	1278	283	60279	126	26838	10	2130
キスイタナイス	90	19170	19	4047	142	30246	1	213	98	20874	7	1491
ユスリカ類の幼虫							26	5538	2	426	7	1491

表3 2005年夏期(6月12日)の調査結果

	A		B		C		D		E		F		G	
	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>
トンガリドロクダムシ	2	426	202	43026	2	426	2	426	88	18744	30	6390	16	3408
ニホンドロソコエビ							2	426			4	852		
モズミヨコエビ	29	6177	2	426	2	426								
ポシエットトゲオヨコエビ			1	213			1	213	7	1491	8	1704	2	426
ヨコエビ類合計	31	6603	205	43665	4	852	5	1065	95	20235	42	8946	18	3834
キスイタナイス	60	12780	95	20235	103	21939			233	49629	4	852		
タデジマイソギンチャク	1	213	3	639										
ミズヒキゴカイ	1	213			6	1278								
イトゴカイ類			19	4047					98	20874	22	4686		
エドガワミズゴマツボ													1	213
ブドウガイ													1	213
ムラサキガイ	1	213	1	213										
ホトギスガイ	21	4473	5	1065	1	213			1	213				
アサリ	11	2343												
トビムシ(昆虫)	2	426												
ガムシの1種							1	213					1	213
昆虫不明種成虫							1	213						
昆虫不明種幼虫	1	213									1	213		

表4 2006年夏期調査(7月29日)の調査結果

	A		B		C		D		E		F		G	
	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>	個体数	1m <sup>2</sup>
トンガリドロクダムシ	29	6177	71	15123	41	8733			76	16188	51	10863	2	426
ニホンドロソコエビ														
モズミヨコエビ	7	1491			2	426								
フトメリタヨコエビ														
ヨコエビ類合計	36	7668	71	15123	43	9159	0	0	76	16188	51	10863	2	426
キスイタナイス	60	12780	91	19383					52	11076				
タデジマイソギンチャク	1	213	2	426										
ヒモムシ類									1	213				
スピオ科の1種			1	213										
イトゴカイ類	23	4899	50	10650	6	1278	4	852	29	6177	1	213	10	2130
ミズヒキゴカイ			1	213	2	426								
クレハガイ	1	213												
ホトギスガイ	7	1491	2	426	3	639								
ユスリカ類の幼虫							21	4473	2	426	7	1491	25	5325
昆虫不明種幼虫											1	213	1	213

<まとめ>

1) ヨコエビ類

- ・ トンガリドロクダムシは、全定点で出現し個体数も多く、干潟表層部におけるヨコエビの最優占種であった。
- ・ モズミヨコエビとポシエットトゲオヨコエビは、主に海藻の隙間に隠れて生息するヨコエビであるが、アオサなど海藻の繁茂がほとんどない定点Bでポシエットトゲオヨコエビ

ビが高密度で出現したことは意外な結果であった。干潟表層部に露出した粗い海砂や貝殻の隙間に潜んで棲息していると考えられた。

- ・ニホンドロソコエビは出現個体数が少なかった。
- ・ヨコエビ類だけを合計した個体数では、定点 B と E が特に多く、1m<sup>2</sup>あたりに換算するとおよそ 80,000 個体が生息していることになった。高密度で生息していたのはトンガリドロクダムシとポシエットトゲオヨコエビであった。

## 2) その他の生物

- ・ホトトギスガイは定点 A で多く、主に夏期の水温が高い時期に北池干潟の鋼管寄りの場所で広くマットを形成していた。
- ・カワゴカイ属（汽水域に生息するゴカイ）は、南池の淡水湿地からの流れ込みがある定点 F で最も個体数が多かった。
- ・スピオ科の一種（ドロオニスピオもしくはその近似種と考えられ、干潟の表層部に泥で固めた棲管を作って生息している）は、定点 D で比較的多く出現した。
- ・イトゴカイ科は定点 D で多く出現した。
- ・キスイタナイスは定点 A、C および E で出現数が多かった。定点 A ではホトトギスガイのマットの隙間に、定点 C と E ではホソジュズモの葉上に棲管を作り高密度で生息していた。
- ・ユスリカ類の幼虫は定点 D、E および F で出現した。淡水の影響がある場所に生息していると考えられる。

## 3) 2005 年および 2006 年のヨコエビ定量調査結果との比較

- ・2005 年と 2006 年の夏期調査の結果と比較すると、各定点での出現種や優占種はよく似た結果であり、小型シギ・チドリ類の餌となる干潟表層部に生息するヨコエビ類などのマクロベントスの生息状況としては大きな変化はないと考えられた。
- ・昨年度の底生生物調査（3 月で冬期もしくは春期にあたる）でヨコエビ類の減少を報告した。今年度の冬期調査でもトンガリドロクダムシなどは目視では少なく、これは季節的な変化によるものかもしれない。2005 年および 2006 年は年 4 回、季節ごとに同様の調査を行っており、その結果からは季節による個体数や優占種の変化なども見られた。
- ・小型シギ・チドリ類の餌の状況としては大きく悪化はしていない可能性もあるため、今後は別の季節にも調査を行うことが必要かもしれない。
- ・今回の調査には NPO 法人南港ウェットランドグループ、野鳥ガイド有志、港区の築港中学校の理科クラブが参加し、現地でのサンプリングと室内でのソーティング作業に取り組んだ。NPO と地域の学校が連携し、野鳥園臨港緑地を環境学習の場に活用された例にもなった。今後も市民や地域の学校などと連携して取り組める調査などを行い、多くの方に野鳥園臨港緑地の干潟の生物の賑わいや重要性を知ってもらえる機会を作りたい。

c) 絶滅危惧種の生息調査

1. ハクセンシオマネキの分布・個体数調査

・今年度は西池と北池の干潟で 195 個の巣穴（過去最大数）を確認した（図 23）。

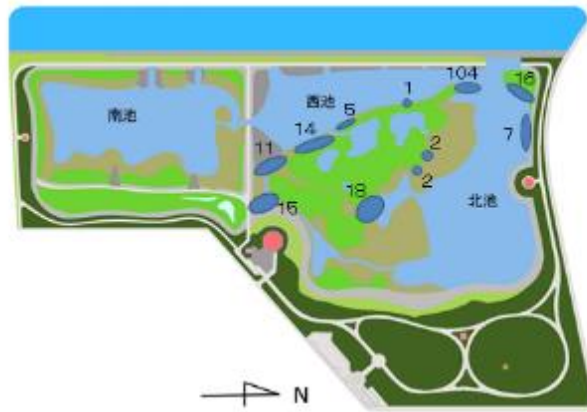


図 23 ハクセンシオマネキの巣穴確認地点および巣穴数

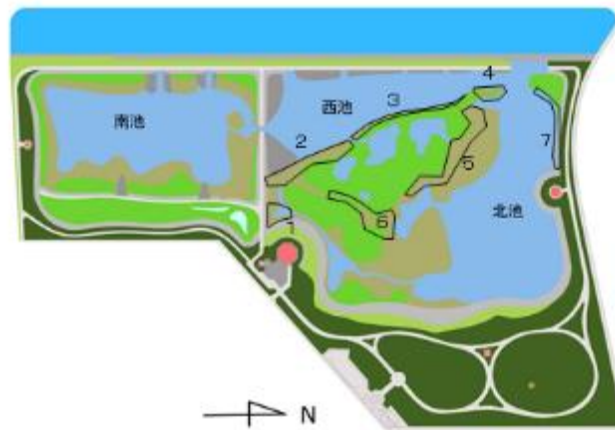


図 24 ハクセンシオマネキ分布調査エリア

- 1. 展望塔前の滞筋周辺
- 2. 西池干潟の南側
- 3. 西池干潟の北側
- 4. 北池鋼管前のヨシ原周辺
- 5. 北池干潟の鋼管寄りのヨシ原周辺
- 6. 北池奥のヨシ原内およびその周辺
- 7. 北池の北側の石積み護岸沿いの干潟

表 5 調査年ごとの巣穴数の推移

調査エリア	2008年	2013年	2014年	2015年
1	1	4	10	15
2	7	16	11	25
3	2	0	9	6
4	39	64	40	104
5	1	3	0	4
6	3	8	14	18
7	8	18	13	23
合計	61	113	97	195

- ・今年度は昨年に比べて巣穴数がほぼ 2 倍に増加していた。
- ・展望塔前から西池干潟の南側（エリア 1 および 2）は年々巣穴数が増加している。

- ・北池の鋼管前のヨシ原周辺（エリア 4）は最も巣穴数の多い場所で、2014 年には減少したが、2015 年には大きく増加し、最大数となった。
- ・今年度の調査では巣穴の直径が 1 cm に満たないような小さな巣穴（図 25）が多かった。これは、昨年に新たに定着した個体が多かったことによると考えられる。現在高密度に生息している場所は、このまま小さな個体の成長が進めばそれぞれのなわばりが広がって淘汰される個体が出て、個体数は少し減少した位置で安定するのではないかと予測される。
- ・南池では今年度も巣穴および生息はなかった。



図 25 ハクセンシオマネキの直径 1 c m に満たない小さな巣穴

2. オオノガイの分布・個体数調査

今年度は北池干潟で 2 個体の生息を確認したのみであった（図 26 および 27）。西池の東岸でも本種の水管のものと思われる穴を 2 ヲ所見つけたが、調査時にやや水深があったため確認できなかった。

昨年度の 2015 年 3 月 18 日の調査では北池と西池の干潟で 25 個体を確認していたが、今年度は個体数が大きく減少した。原因としては、北池干潟の生息地点周辺にはテッポウエビやアナジャコ類の巣穴がよく見られたことや、今年は冬期にカモ類が多かったことから、例年よりも底質の攪乱が多く、掘り返されるなどして減少した可能性が考えられる。



図 26 オオノガイの水管の穴

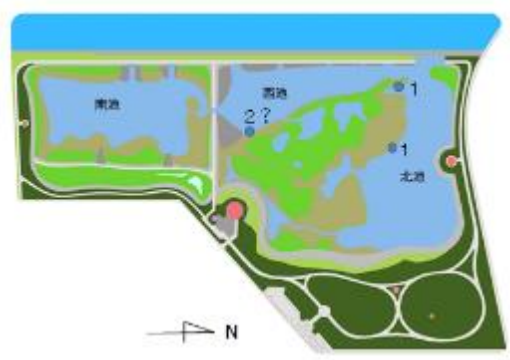


図 27 オオノガイの生息確認地点

### 3. その他の絶滅危惧種について

今年度の調査では 13 種の絶滅危惧種の底生生物を確認した。(表 6)

昨年度に生息を確認したウミニナ(図 28)は、夏期調査では北池で 3 個体、南池で 1 個体を認めた。冬期調査では南池で 4 個体を確認した。ウミニナは、大阪湾では最近増加傾向にあり、今後さらに個体数が増えていくかどうか注目していく必要がある。

干潟周辺の石積みで、ナギサノシタタリ(図 29)とウスコミミガイ(図 30)の生息を確認した。どちらも個体数は比較的多く、大阪湾における重要な生息地の一つになっている。

ウチノミツボ(図 31)、ナギツボ(図 32)、オウギウロコガイ(図 33)、マツモトウロコガイはいずれも砂泥に埋もれた転石の裏という特殊な環境に生息する貝類で、今年度の調査における発見が初記録となった。ウチノミツボは大阪府ではこれまで未記録の種であった。オウギウロコガイは 6 月 14 日に行われた第 8 回大阪湾生き物一斉調査で採集された。

絶滅危惧種の多くは特殊な生息環境に生息しており、過度の攪乱や環境の変化で個体群が大きなダメージを受けることがあるため、北池の鋼管周辺などに安定した生息地を維持する必要があるだろう。

表 6 平成 27 年度に記録された絶滅危惧種の底生生物

門	和名	学名	大阪府レッドリスト	環境省	日本ベントス学会
1 環形動物門	ヤマトカワゴカイ	<i>Hediste diadroma</i>	情報不足		
2 軟体動物門	ヒナユキスズメ	<i>Phenacolepas</i> sp.	絶滅危惧 II 類	準絶滅危惧	準絶滅危惧
3 軟体動物門	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>	準絶滅危惧	準絶滅危惧	準絶滅危惧
4 軟体動物門	ウチノミツボ(※)	<i>Iravadia (Pseudonoba) aff. Densilabrum</i>		絶滅危惧 II 類	絶滅危惧 II 類
5 軟体動物門	ナギツボ(※)	<i>Vitrinella</i> sp.		準絶滅危惧	準絶滅危惧
6 軟体動物門	ウスコミミガイ	<i>Laemondonta exaratoidea</i>	絶滅危惧 II 類	準絶滅危惧	準絶滅危惧
7 軟体動物門	ナギサノシタタリ	<i>Microtralia acuteocinoides</i>	絶滅危惧 II 類		
8 軟体動物門	オウギウロコガイ(※)	<i>Galeommela utinomii</i>		絶滅危惧 I 類	絶滅危惧 I B 類
9 軟体動物門	マツモトウロコガイ(※)	<i>Paraborniola matsumotoi</i>		準絶滅危惧	準絶滅危惧
10 軟体動物門	オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>	絶滅危惧 II 類	準絶滅危惧	準絶滅危惧
11 節足動物門	ヨモギホンヤドカリ	<i>Pagurus nigrofascia</i>			準絶滅危惧
12 節足動物門	ハクセンシオマネキ	<i>Uca lactea</i>		絶滅危惧 II 類	準絶滅危惧
13 棘皮動物門	ヒモイカリナマコ	<i>Patinapta ooplax</i>	準絶滅危惧		

(※)が付いている種は今年度に初めて記録された種

評価は大阪府レッドリスト、環境省第4次レッドリスト(貝類、その他無脊椎動物)、日本ベントス学会編「干潟の絶滅危惧動物図鑑」(東海大学出版会)による

評価カテゴリ(日本ベントス学会編「干潟の絶滅危惧動物図鑑」より)

絶滅危惧 I 類: 絶滅の危機に瀕している種。現在の状況をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの

絶滅危惧 I A 類: ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの

絶滅危惧 I B 類: IA 類ほどではないが、近い将来に野生での絶滅の危険性が高いもの

絶滅危惧 II 類: 絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧: 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの

情報不足: 評価するだけの情報が不足している種



図 28. ウミニナ (2016 年 2 月 24 日)



図 29. ナギサノシタタリ (2015 年 7 月 15 日)



図 30. ウスコミミガイ (2015 年 6 月 14 日)



図 31. ウチノミツボ (2015 年 7 月 15 日)



図 32. ナギツボ (2015 年 8 月 12 日)



図 33. オウギウロコガイ (2015 年 6 月 14 日)

#### d) 海岸生物調査

今年度の調査では 106 種の海岸生物が記録された (表 7)。このうちの 16 種が初めての記録であった。

とくに多様な生物が生息していたのは北池の鋼管周辺であった (図 34)。この場所は、潮通しが良く、砂泥質の干潟と転石地が適度に混在した環境が存在することで、砂泥底に棲む種から岩礁に棲む種まで、多様な海岸生物が生息できる環境となっていることを確認した。

また、夏期の調査で西池と北池鋼管周辺において外来種とされているオショロミノウミウ



シ属の一種 *Cuthona perca* (図 35) の生息を確認した。本種は 2000 年頃から園内で生息を確認している。夏期調査では 20cm×20cm の転石帯に平均して 2~3 個体確認され、その周囲には餌にしていると考えられるイソギンチャク類がよく付着していた。



図 34. 多様な海岸生物が生息する北池の鋼管周辺  
(2015 年 7 月 15 日)



図 35. 外来種と考えられるオショロミノ  
ウミウシ属の一種 (2015 年 7 月 15 日)

#### (5) 北池の鋼管と捨石からの海水の出入りの調査

干潟現況調査 (2016 年 2 月 24 日) 時に、北池の西側護岸下の鋼管 (6 本) および捨石からの海水の流入と流出状況を目視にて調査した。海水は、捨石と鋼管から順調に流れておりとくに問題はなかった。写真では、鋼管を通して海側をわずかに見通すことができた。



図 36. 北池の鋼管。左から 3 本目の鋼管にわずかに海からの明かりが見える。

表 7 平成 27 年度に確認された海岸生物

	門	和名	学名	夏	冬
1	海綿動物門	Halichondria sitiens (※)	<i>Halichondria sitiens</i>	○	
2	海綿動物門	カワナシカイメン属の一種 (※)	<i>Halichondria</i> sp.	○	
3	海綿動物門	カワナシカイメン属の一種 (※)	<i>Halichondria</i> sp.	○	
4	刺胞動物門	タテジマイソギンチャク	<i>Haliplanella lineate</i>	○	○
5	扁形動物門	ウスヒラムシ	<i>Notoplana humilis</i>	○	○
6	紐形動物門	リュウキュウヒモムシ (※)	<i>Iwatanemertes piperata</i>	○	○
7	環形動物門	サミドリサシバ	<i>Eulalia viridis</i>	○	○
8	環形動物門	ミロクウロコムシ	<i>Halosydna brevisetosa</i>	○	○
9	環形動物門	シリシ科の一種	Syllidae gen. et sp. indet.	○	○
10	環形動物門	コケゴカイ	<i>Ceratonereis erythraeensis</i>	○	○
11	環形動物門	ヤマトカワゴカイ	<i>Hediste diadroma</i>	○	○
12	環形動物門	オイワケゴカイ	<i>Lycastopsis augeneri</i>		○
13	環形動物門	アシナゴゴカイ	<i>Nereis (Neanthes) succinea</i>		○
14	環形動物門	スナイソゴカイ	<i>Perinereis mictodonta</i>		○
15	環形動物門	スピオ科の一種	Spionidae gen. et sp. indet.	○	○
16	環形動物門	ミズヒキゴカイ	<i>Cirriformia cf. comosa</i>	○	○
17	環形動物門	イトゴカイ類	Capitellidae spp.	○	○
18	環形動物門	カニヤドリカンザシゴカイ	<i>Ficopomatus enigmaticus</i>		○
19	環形動物門	エゾカサネカンザシゴカイ	<i>Hydroides ezoensis</i>	○	○
20	環形動物門	ウズマキゴカイ科の一種	Spirorbidae gen. et sp. indet.	○	○
21	軟体動物門	コシダカガンガラ	<i>Omphalius rusticus</i>	○	
22	軟体動物門	イシダタミ	<i>Manodonta labio</i>	○	○
23	軟体動物門	ヒナユクスズメ	<i>Phenacolepas</i> sp.	○	
24	軟体動物門	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>	○	○
25	軟体動物門	マルウズラタマキビ	<i>Littoraria articulata</i>	○	○
26	軟体動物門	タマキビ	<i>Littorina brevicula</i>	○	○
27	軟体動物門	アラレタマキビ (※)	<i>Nodilittorina radiata</i>	○	
28	軟体動物門	ウチノミツボ (※)	<i>Iravadia (Pseudonoba) aff. Densilabrum</i>	○	
29	軟体動物門	ナギツボ (※)	<i>Vitrinella</i> sp.	○	
30	軟体動物門	クリイロカワザンショウ属の一種	<i>Angustassiminea</i> sp.	○	○
31	軟体動物門	シマメノウフネガイ	<i>Crepidula onyx</i>	○	
32	軟体動物門	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	○	
33	軟体動物門	イボニシ	<i>Thais clavigera</i>	○	○
34	軟体動物門	ムギガイ	<i>Mitrella bicincta</i>	○	○
35	軟体動物門	アラムシロ	<i>Reticunassa festiva</i>	○	○
36	軟体動物門	カクメイ科の一種 (※)	Cornirostridae gen. et sp. indet.	○	
37	軟体動物門	ウミフクロウ	<i>Pleurobranchaea japonica</i>		卵
38	軟体動物門	イズミミドリガイ (※)	<i>Elysia nigrocapitata</i>	○	
39	軟体動物門	オショロミノウミウシ属の一種	<i>Cuthona perca</i>	○	
40	軟体動物門	ブドウガイ	<i>Haloa japonica</i>	○	○
41	軟体動物門	ウスコミミガイ	<i>Laemondonta exaratoides</i>	○	○
42	軟体動物門	ナギサノシタタリ	<i>Microtralia acuteocinoides</i>	○	○
43	軟体動物門	クイチガイサルボウ (※)	<i>Scapharca inaequivalvis</i>	○	
44	軟体動物門	ホトトギスガイ	<i>Musculista senhousia</i>	○	
45	軟体動物門	ムラサキガイ	<i>Mytilus galloprovincialis</i>	○	○
46	軟体動物門	ミドリイガイ	<i>Perna viridis</i>		○
47	軟体動物門	コウロエンカワヒバリガイ	<i>Xenostrobus securis</i>	○	○
48	軟体動物門	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	○	○
49	軟体動物門	ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>	○	○
50	軟体動物門	ウネナシトマヤ	<i>Trapezium liratum</i>	○	○
51	軟体動物門	チリハギガイ	<i>Lasaea undulate</i>	○	○
52	軟体動物門	オウギウロコガイ (※)	<i>Galeommela utinomii</i>	○	
53	軟体動物門	マツモトウロコガイ (※)	<i>Paraborniola matsumotoi</i>	○	
54	軟体動物門	クチバガイ	<i>Ptericola cf. lithophaga</i>		○
55	軟体動物門	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>		○
56	軟体動物門	オオノガイ	<i>Mya arenaria onogai</i>	○	○

	門	和名	学名	夏	冬
57	節足動物門	シマウミグモ	<i>Ammothea hilgendorfi</i>	○	○
58	節足動物門	タテジマフジツボ	<i>Amphibalanus amphitrite</i>	○	○
59	節足動物門	アメリカフジツボ	<i>Amphibalanus eburneus</i>	○	○
60	節足動物門	ヨーロッパフジツボ	<i>Amphibalanus improvisus</i>	○	○
61	節足動物門	シロスジフジツボ	<i>Fistulobalanus albicostatus</i>		○
62	節足動物門	コノハエビ	<i>Nebalia japonensis</i>		○
63	節足動物門	ニホンドロソコエビ	<i>Grandidierella japonica</i>		○
64	節足動物門	モズミヨコエビ	<i>Ampithoe valida</i>	○	○
65	節足動物門	トンガリドロクダムシ	<i>Monocorophium insidiosum</i>	○	○
66	節足動物門	ポシエットゲオヨコエビ	<i>Eogammarus possjeticus</i>	○	○
67	節足動物門	フトメリタヨコエビ	<i>Melita rylovae</i>	○	○
68	節足動物門	ヒゲツノメリタヨコエビ	<i>Melita setiflagella</i>	○	○
69	節足動物門	フサゲモクズ	<i>Hyalte barbicornis</i>	○	○
70	節足動物門	ヒメハマトビムシ	<i>Platorchestia pacifica</i>	○	○
71	節足動物門	マルエラワレカラ	<i>Caprella penantis</i>		○
72	節足動物門	ウミミズムシ	<i>Ianropsis longiantennata</i>		○
73	節足動物門	イソコツブムシ属の一種	<i>Gnорimosphaeroma</i> sp.	○	○
74	節足動物門	フナムシ	<i>Ligia exotica</i>	○	○
75	節足動物門	ノトチウチンワラジムシ (※)	<i>Armadilloniscus notojimensis</i>	○	
76	節足動物門	キスイタナイス種群の一種	<i>Sinelobus cf. stanfordi</i>	○	
77	節足動物門	スジエビモドキ	<i>Palaemon serrifer</i>	○	
78	節足動物門	テッポウエビ	<i>Alpheus brevicristatus</i>	○	○
79	節足動物門	セジロムラサキエビ	<i>Athanas japonicus</i>	○	
80	節足動物門	アナジャコ属の一種	<i>Upogebia</i> sp.		巢穴
81	節足動物門	フトウデネジレカニダマシ (※)	<i>Pisidia serratifrons</i>	○	
82	節足動物門	コブヨコバサミ	<i>Clibanarius infraspinus</i>	○	
83	節足動物門	ホンヤドカリ	<i>Pagurus filholi</i>	○	
84	節足動物門	ユビナガホンヤドカリ	<i>Pagurus minutus</i>	○	○
85	節足動物門	ヨモギホンヤドカリ	<i>Pagurus nigrofascia</i>		○
86	節足動物門	イシガニ	<i>Charybdis japonica</i>	○	○
87	節足動物門	ゴカクイボオウギガニ科の一種 (※)	Halimedinae gen. et sp. indet.	○	
88	節足動物門	シワオウギガニ	<i>Macromedaeus distinguendus</i>	○	○
89	節足動物門	クロベンケイガニ	<i>Chiromantes dehaani</i>	○	
90	節足動物門	アカテガニ	<i>Chiromantes haematocheir</i>	○	
91	節足動物門	ヒメベンケイガニ	<i>Nanosesarma gordonii</i>	○	
92	節足動物門	カクベンケイガニ	<i>Parasesarma pictum</i>	○	○
93	節足動物門	ヒライソガニ	<i>Gaetice depressus</i>	○	○
94	節足動物門	ヒライソガニ属の一種	<i>Gaetice</i> sp.	○	
95	節足動物門	イソガニ	<i>Hemigrapsus sanguineus</i>	○	○
96	節足動物門	ケフサイソガニ	<i>Hemigrapsus penicillatus</i>	○	○
97	節足動物門	タカノケフサイソガニ	<i>Hemigrapsus takanoi</i>	○	
98	節足動物門	ハクセンシオマネキ	<i>Uca lactea</i>	○	
99	腕足動物門	スズメガイダマシ	<i>Discradisca stella</i>	○	
100	棘皮動物門	イトマキヒトデ	<i>Asterina pectinifera</i>	○	○
101	棘皮動物門	ダイニチリンチビクモヒトデ (※)	<i>Ophiactis macrolepidota</i>	○	
102	棘皮動物門	マナマコ	<i>Apostrichopus japonicus</i>	○	
103	棘皮動物門	ヒモイカリナマコ	<i>Patinapta ooplax</i>		○
104	原索動物門	イタボヤ類	<i>Botrylloides</i> spp.	○	
105	原索動物門	マンハッタンボヤ	<i>Molgula manhattensis</i>		○
106	脊索動物門	イソミミズハゼ	<i>Luciogobius</i> sp.	○	

(※) が付いている種は今年度初めて記録された種

### <まとめ及び考察>

- ・夏期および冬期の調査では、北池干潟はアオサ類などの海藻類の繁茂はなかった。調査日以外の春（4～5月）には干潟から展望塔前の滯筋にかけては広くアオサ類が繁茂していたが、夏場には急激に減少するようである。干出している干潟部分は表面に海砂層がよく露出し、底質中も酸素がよく通り、ほとんど還元化していなかった。
- ・西池と南池では夏期・冬期とも潮間帯から潮下帯にかけてホソジュズモが繁茂していた。
- ・シギ・チドリ類の餌生物の状況としては、夏期・冬期ともにゴカイ類がほぼ全域の干潟に多く生息し、カニ類では石積みの隙間や干潟にケフサイソガニ類・イソガニなどのカニ類が多く、中型・大型のシギ・チドリ類の餌は豊富に生息していた。
- ・小型シギ・チドリ類の重要な餌となるヨコエビ類など干潟表層部のマクロベントスに関しても、ヨコエビ定量調査の結果からは2005および2006年に行った同様の調査の結果と比べて大きな変化は無く、夏期にトンガリドロクダムシなどが豊富に生息していた。季節変化もあると考えられるため今後は別の季節に調査を行うことも必要かもしれない。
- ・絶滅危惧種の生息状況としてはハクセンシオマネキの個体数は昨年からはほぼ2倍に増加し、今年度は新たに定着した小さな個体が多かったとみられる。オオノガイは昨年に比べ個体数が大きく減少していたことが危惧される。野鳥園臨港緑地は大阪湾奥部における絶滅危惧種の底生生物の生息地として貴重であり、その保全は重要であることから今後もモニタリングが必要である。
- ・今年度の調査では、北池のヨシ原内の水たまりの面積が以前に比べて広がり、地盤沈下が年々進行しているものと思われる。その一方で北池の鋼管寄りの干潟を中心にカキ礁が面積を拡大させており、今後ますます拡大していくことが予想される。また、冬期に多く飛来したカモ類による掘り返しや他の底生生物の生息によるとみられる底質の攪乱も広い範囲で確認した。こうした地形や環境の変化や、他の生物との関係などによってシギ・チドリ類の餌環境や絶滅危惧種の底生生物の生息に悪影響が出る恐れもあるため、鳥類調査の結果と併せて今後さらなるモニタリングと保全策の検討が必要である。

### (イ) 環境学習

#### (1) 野鳥ガイド (右写真: ガイド風景)

今年度は新たに養成した野鳥ガイドが6月以降に来園者への案内を担当した。

全3回の野鳥ガイド養成講座（前年度に1回、今年度に2回）を受講し、実際のガイドの仕方についてのOJTを受け、すべての研修を修了した17名（男性10名、女性7名）を野鳥ガイドとして登録した。野鳥ガイドは、ガイドの制服と名札を付け10時～15時まで



展望塔（時には北観察所）でスコープ（25倍以上の望遠鏡）や図鑑を用いて、来園者に

野鳥の案内をおこなった。不明な点は、NPO 南港ウェットランドグループのメンバーが  
随時サポートした。

- 実施回数：36回（1日2名で実施。但し、野鳥ガイドのOJT日は4～8名で実施）
- 実施日：野鳥の種類が多い4月、5月、8月、9月および10月の各月に4回、11月  
および3月の各月に3回、6月、7月、12月、1月および2月の各月に2回を実施し  
た。ガイドは原則として日曜・祝日の10時～15時に行くが、干満の状況によって日  
曜以外も実施した。

野鳥ガイドの案内を受けた人数は、平均すると1回あたり44人であったが、80～90人  
のガイドを実施した日もあった。野鳥ガイドの日は、毎回午後になると、はじめて野鳥園  
に来られる家族連れ、夫婦、友人同士などや、イベント帰りに立ち寄る人が多かった。

野鳥ガイドは、倍率の高いスコープ（望遠鏡）を使って、まずは来園者に肉眼や双眼鏡で  
は判らない野鳥の姿をはっきりと見てもらい、質問を受けながら、いろんな野鳥の行動の  
意味を伝えた。とくに、野鳥園にはじめて来られた方、野鳥観察がはじめての方などに  
は、なにも居ないように見えるところに、どんな野鳥がいるのか、肉眼でも一緒に探しながら、  
その姿や生態をスコープでじっくりと観察してもらった。

ガイドで人気のあった野鳥は、春と秋の渡りの時期ではシギ・チドリ類（コチドリ、シロ  
チドリ、メダイチドリ、トウネン、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ  
ギなど）で、餌のとり方、歩き方、渡りのことなどに驚く来園者も多かった。とくに、小  
さい体で10000キロ以上も渡ることは驚かれる方が多く、大阪湾での野鳥園の大切さ  
を知っていただけた。

10月と11月にはクロツラヘラサギやヘラサギという珍しい種が渡来し、大人気となっ  
た。この2種は、大型の水鳥で見やすく、特徴のある嘴の形には感嘆の声があがってい  
た。また、12月3日からはツクシガモが渡来（最大で58羽：2月2日）し、美しい羽根  
と飛んだときの姿が人気となっていた。さらに、1月になると、体が白く、目の周りが黒  
いミコアイサのみ（通称パンダガモ）も渡来し、一日中餌をとる姿が大人気であった。

猛禽類も多数飛来するが、いつも人気のあるのが杭にとまって餌を食べるミサゴで、近距  
離で迫力ある姿は来園者の人気者であった。チュウヒやハイタカも時々やってくるので、  
カメラを持った来園者の皆さんには被写体としていつも人気があった。

**(2) 野鳥ガイド養成講座（第1回は前年度に実  
施済み）**

- **第2回**：「教材を利用した環境学習の方法  
～シギチになってみよう～」
- 講師：1名／スタッフ：2名
- 実施日：2015年4月19日（日）13～15時
- 参加者：18名



- 講座内容
- 干潟でシギやチドリが嘴を使ってどのような餌をとっているのかを、シギやチドリになって体験するプログラムをグループワークで実施した。同時に、野鳥園でのシギやチドリの生態や渡りのことについて勉強した。

- 第3回：

「野鳥園の湿地や干潟に渡来する野鳥」  
「野鳥園の湿地の生きものと野鳥のつながり」

- 講師：2名
- 実施日：2015年4月25日（土）10～14時
- 参加者：18名
- 講座内容

過去のデータから野鳥園の湿地に渡来する野鳥の種類や特徴を勉強し、さらには、野鳥園の湿地の生きものを紹介し、シギ・チドリ類の餌となっている種や稀少種についても勉強する。また、二つの講義を通して、年々減少するシギ・チドリ類の大阪湾における貴重な渡来地として、野鳥園の湿地をどう保全していくかのヒントを学ぶ。

### (3) はじめての野鳥ウォッチ

- 実施日：2015年5月9日（土） 13～15時
- 参加人数：15名
- NPO スタッフ：3名

バードウォッチングをはじめたい方、初めて間もない方を対象に、双眼鏡の使い方や身近な鳥の見分け方を講義した後に、春の渡り鳥をゆっくりと観察することを目的に開催した。

### (4) ヨコエビ類を調べる（ヨコエビ類定量調査への一般参加）

- 実施日：2015年7月11日（土） 9～16時
- 参加人数：15名（築港中学校の生徒と先生、海遊館スタッフも参加）
- NPO スタッフ：3名

2005年と2006年に行ったヨコエビ定量調査結果と比較する目的と同時に、参加者の皆さんにはどんな場所にどの位の個体数のヨコエビ類が居て、どのように数えるのかを知ってもらうために、市民参加型の調査を行った。

午前中に6地点からサンプルを採取し、午後には採取したサンプルから生き物だけを取り出すソーティングという作業を会議室で行った。シギ・チドリ類が食べている餌を数えるという作業をすることで、シギ・チドリ類や野鳥園の干潟を見る目が変わるという感想をもらった。